

鈴木 俊一

環境大臣

1953年4月13日生(49才)。本籍 岩手県。1977年3月早稲田大学教育学部卒業。1977年4月全国漁業協同組合連合会(1985年3月まで)。1985年4月衆議院議員鈴木善幸秘書。1990年2月衆議院議員当選(第39回)。3月自由民主党国民運動本部推進部長(1991年11月まで)。1991年11月衆議院法務委員会理事(1993年1月まで)。1993年7月衆議院議員当選(第40回)。8月衆議院災害対策特別委員会理事(1994年1月まで)。9月自由民主党国民運動本部副本部長(1995年3月まで)。1994年7月衆議院災害対策特別委員会理事(1994年9月まで)。7月自由民主党全国組織委員会地方組織局長(1995年3月まで)。7月衆議院通信委員会理事(1994年10月まで)。10月衆議院厚生委員会理事(1996年9月まで)。10月自由民主党水産部会長(1996年10月まで)。1996年2月自由民主党人事局次長(1996年10月まで)。10月衆議院議員当選(第41回)。11月厚生政務次官(1997年9月まで)。1998年8月自由民主党社会部会長(1999年10月)。2000年6月衆議院議員当選(第42回)。2000年12月自由民主党政務調査副会長(2001年1月まで)。2001年1月衆議院厚生労働委員長(2002年1月)。2002年1月自由民主党副幹事長。1月衆議院厚生労働委員会理事。2002年9月環境大臣。

藤田 雄山

広島県知事

1972年3月慶應義塾大学商学部卒。1972年4月三井物産株式会社、1982年9月参議院議員秘書、1986年7月参議院議長秘書、1988年10月参議院議員秘書。1989年7月参議院議員。1993年11月29日広島県知事、1997年11月29日広島県知事(再任)、2001年11月29日広島県知事(再任)。

増原 義剛

衆議院議員

1945年6月広島県広島市東蟹屋町に生まれる。1958年尾長小学校を卒業し、修道中学に入校。1964年修道高校を卒業し、一浪後東京大学に入学。1969年6月大学紛争のため3ヶ月おくれで卒業し、大蔵省に入省。主として税と予算畑を歩む。その間、横浜市に出向し、地方行政も経験。また、外務省の在イギリス日本国大使館に勤務し、サッチャー政権下での金融ビック・バンやブラック・マンデーを経験。地球環境サミット後に環境省に出向し、「環境基本法」策定。1995年6月大蔵省東海財務局長を辞して、郷里広島にもどり、政治活動を開始。1996年 第41回衆議院議員選挙に立候補。1997年環境経済研究所「ミッション・ジャパン」設立。2000年第42回衆議院議員選挙初当選(広島3区)。現在の役職：衆議院 財務金融委員会委員、経済産業委員会委員、災害対策特別委員会委員。自由民主党 財政・金融・証券関係団体副委員長、労政局次長、写真・映像局次長、広島県衆議院選挙区支部長。議連：憲法調査推進議員連盟、予防外交推進国会議員連盟、地球環境国際議員連盟、リサイクルシステム議員懇談会、自然エネルギー促進議員連盟、自然体験活動推進議員連盟、人口・食糧・環境に関する議員連盟、少子化社会対策議員連盟、砂防事業促進議員連盟、自動車整備議員連盟、日本産業再生議員連盟、構造改革研究会、たばこ流通研究会、日本の新生を進める議員の会、小泉政権の聖域なき構造改革の断行を支援する若手議員の会など。趣味：山歩き、囲碁(3段)

加藤 修一

参議院議員

1981年北海道大学大学院地球環境科学研究科修士、学術博士号取得。北見工業大学助手、(株)たくぎん総合研究所次長、小樽商科大学教授(地球環境経済)を経て、1995年参議院議員。GLOBE、GEA実行委員、自然エネルギー促進議員連盟(超党派)事務局長、公明党エコジャパン会議事務局長。公明党環境ホルモン問題プロジェクトチーム座長。

牟田 泰三

広島大学 学長

1960年九州大学理学部物理学科卒業、1962年東京大学大学院数物系研究科物理学専攻修士課程修了、1965年同博士課程後期修了。1965年京都大学理学部助手、1971年京都大学基礎物理学研究所助教授、1982年広島大学理学部教授、1991年同大学評議員、1995年同大学理学部長、1999年同大学副学長。担当教育科：量子力学。研究内容：[1] 素粒子論、[2] 量子色力学、[3] 場の量子論における動的対称性の破れ、[4] 重力の量子論と宇宙論。著書：[1] "Foundations of Quantum Chromodynamics" (1st ed. 1987, 2nd ed.1998, World Scientific Pub.Co.), 『電磁力学』(初版1992, 2版1996, 岩波書店)、主要論文：[1] W.A. Bardeen, A.J. Buras, D.W. Duke and T. Muta, Deep Inelastic Scattering beyond the Leading Order in Asymptotically Free Gauge Theories, Phys. Rev., Vol.D18 No.11,3998-4017, (1978). [2] J. Kodaira, S. Matsuda, T. Muta, K. Sasaki and T. Uematsu, Quantum-chromodynamic Effects in Polarized Electroproduction, Phys. Rev., Vol.D20 No.3, 627-629, (1979). [3] K-I. Aoki, Z. Hioki, R. Kawabe, M. Konuma and T. Muta, Electroweak Theory, Prog.Theor. Phys., Suppl.No.73, 1-225, (1982). [4] T. Inagaki, S. Mukaigawa and T. Muta, Soluble Model of Four-Fermion Interactions in de Sitter Space, Phys.Rev., Vol. D52 No.8, 4267-4271, (1995). 所属学会：日本物理学会、日本天文学会。1987年よりInternational Journal of Modern Physics編集委員。1995-99年広島県産業振興機構運営委員、1999年より広島県産業振興機構理事。

堤 治

東京大学 医学部 産科婦人科学教室 教授

1976年3月東京大学医学部医学科卒業。1976年6月東京大学医学部付属病院産科婦人科医員。1980年7月東京大学医学部付属病院助手。1983年4月医学博士の学位授与(東京大学)。1985年7月-1987年7月アメリカ合衆国NIHへ留学。1992年7月東京大学医学部付属病院講師、病棟医長。1994年7月東京大学医学部付属病院助教授。1999年4月東京大学医学部付属病院分院産科婦人科学講座教授。東京大学医学部付属病院女性外科科長。東京大学医学部付属助産婦学校校長。科学技術振興事業団CREST「内分泌かく乱物質」研究代表者。2001年4月東京大学大学院医学系研究科産科婦人科学講座教授。賞：日本内分泌学会奨励賞、東京都医師会研究奨励賞。主な研究領域：婦人科領域の腹腔鏡下手術、子宮内膜症の診断・治療、不妊症の基礎的臨床的研究、環境ホルモンの生殖機能への影響、細胞増殖因子特にEGFの生殖生理、性分化異常の基礎と臨床。

ハーマン B.W.M. クーター

経済開発協力機構 (OECD) 環境衛生安全課 主任行政官

1991年11月よりOECD環境衛生安全課の主任行政官を務めている。OECDプログラム(試験ガイドラインプログラム、分類と表示のハーモナイゼーションに関するプログラム、内分泌攪乱化学物質に関するOECDの特別活動、動物福祉の方針に関するOECDの特別活動)のプログラム・ディレクターでもある。主な任務は、それぞれのプログラムの目的を達成するために政治・技術レベルにおいて、加盟国代表、国際機関代表、および非加盟国、NGO、業界団体、労働組合の代表らと緊密に協力して活動することである。ヒトの健康への有害性とリスクアセスメントに関する方針および技術的問題に関し、OECDのシニアアドバイザーも務めている。

ティム メレディス

世界保健機関 (WHO) 国際化学物質安全性計画 (WHO/ILO/UNEP) コーディネーター

2000年よりスイスのジュネーブで世界保健機関国際化学物質安全性計画 (WHO/ILO/UNEP) コーディネーター。過去には、バンダービルト大学 (米国テネシー州ナッシュビル) 臨床毒物学センターにて医学/病理学教授ならびに同センター責任者 (1995-2000年)、英保健省臨床毒物学/環境化学物質および国際関係医学担当官 (1989-1995年) を務めた。ケンブリッジ大学ガイズ医科大学にて教育を受け (1969-1975年)、一般内科および臨床毒物学部門で勤務した (1975-1989年)。ロンドン王室医師会 (1994年) および米国臨床毒物学協会 (1993年) の特別研究員を務めた。

ベン エリック ベングットソン

スウェーデン ストックホルム大学 ITM応用環境研究所 海洋生態毒理学 教授

専門分野は海洋生物に対する単一物質および複合廃水の影響。環境リスクアセスメントにおける新たな試験方法および戦略の開発。廃水中の内分分泌攪乱物質 (ED) に関する研究。すなわち、1) 研究室ベースの甲殻類研究、生殖および発生への影響を追跡する目的でハルバクチクス橈脚類のケンミジンコ (*Nitocra spinipes*) を用いた多世代試験 (海生橈脚類の発生および生殖に関するOECD試験ガイドライン草稿を作成中)。2) 魚類：イトヨ属のハリヨ (*Gasterosteus aculeatus*) への内分分泌攪乱作用の影響を研究室およびフィールドスタディーで試験している。

ジェームス P. カリヤ

米国環境保護庁 科学協力政策局 環境科学者

米国環境保護庁科学協力政策局に所属する環境科学者。インディアナ大学にて環境影響アセスメントでMSESを取得。マサチューセッツ工科大学の大学院課程にて毒物学をさらに研究。米国科学技術会議 (NSTC) の毒物・リスク小委員会の事務局長として勤務。米国環境保護庁、リスク解明実行チームの副議長、環境保護庁殺虫剤関係プログラム課食糧リスク評価課の課長を務める。製造前届出のレビューと化学物質長期アセスメントの分野においても経験を有する。1996-97年、日本国厚生省にてマンスフィールド特別研究員。

ウィリアム S. ストークス

米国国立環境衛生科学研究所 (動物を用いない) 代替の毒性試験法を評価するための省庁合同毒性センター 所長

米国国立環境衛生科学研究所の(動物を用いない) 代替の毒性試験法を評価するための省庁合同毒性センター所長。連邦政府機関が用いる新規試験方法の科学的妥当性を評価するために組織された動物実験代替法に関する多省庁の共同検討組織 (仮訳) (ICCVAM: the Interagency Coordinating Committee on the Validation of Alternative Methods) の運営を担当。ルイビル大学にて理学士号、オハイオ州立大学にて獣医学博士号取得。米国実験動物学会 (ACLAM: American College of Laboratory Animal Medicine) の認定を受けており、現在、米国学術研究会議の実験動物の調査委員会のメンバーを務めている。

浜中 裕徳

環境省 地球環境審議官

1944年7月3日生。本籍 東京都。1967年3月東京大学工学部都市工学科卒業。1966年9月国家公務員採用上級(甲種)試験(建築)合格。1969年4月厚生省環境衛生局公害部公害課。1971年7月環境庁大気保全企画課。1974年4月同大気規制課。1975年9月環境庁長官官房国際課。1976年7月経済協力開発機構日本政府代表部二等書記官。1979年4月同一等書記官。9月環境庁長官官房国際課課長補佐。10月同企画調整局環境管理課課長補佐。1981年7月同局環境影響審査課課長補佐。1983年9月環境庁長官官房総務課環境調査官。1984年7月同上席環境調査官。1986年4月同環境情報企画官。7月環境庁大気保全局企画課交通公害対策室長。1988年7月同大気規制課長。1990年7月同企画調整局地球環境部企画課長。1994年2月同水質保全局企画課長。1995年7月環境庁長官官房付。7月同企画調整局地球環境部長。2001年1月環境省地球環境局長。7月同地球環境審議官。

井口 泰泉

岡崎国立共同研究機構 統合バイオサイエンスセンター 教授

岡山大学大学院修士課程修了、東京大学理学博士、1979年に横浜市立大学文理学部助手、1981-83年カリフォルニア大学バークレー博士研究員、横浜市大助教授を経て1992年教授、2000年からは基礎生物学研究所教授を経て、岡崎国立共同研究機構・統合バイオサイエンスセンター教授に就任し、現在に至る。マウス、魚やカエルを用いてホルモンや内分泌かく乱物質の発生效を研究している。著書に『細胞を中心とした生物学』(広川書店)、『器官形成』(培風館)、『生殖異常』(かもがわ出版)、『環境ホルモンを考える』(岩波書店)、その他アメリカでの著書、学術論文多数。日本内分泌攪乱化学物質学会副会長、環境省、厚生労働省、国土交通省などの委員。

岩本 公宏

三井化学株式会社 環境安全役員付 部長

1966年東京大学大学院修士課程修了。同年、三井石油化学工業に入社。生産技術管理、及び環境安全管理・品質管理を担当。環境安全品質保証部長(1993年)、三井化学誕生とともに(1997年)品質管理部長、環境安全部長を歴任。日本化学工業会のエンドクリンWG主査、BPA5社安全性研究会主査、日本レシボンシブル・ケア協議会の地域対話部会の主査、をはじめとする各種業界活動に従事。

崎田 裕子

ジャーナリスト、環境カウンセラー

1974年立教大学卒業。(株)集英社を経てフリージャーナリスト。生活者の視点で環境分野、特に「循環型社会づくり」を中心に講演執筆に取り組む。また環境省登録環境カウンセラーとして、環境学習の推進にも携わっている。2001年に首相の私的懇談会「21世紀『環の国』づくり会議」委員を務めた。中央環境審議会(循環計画部会)臨時委員、「化学物質と環境円卓会議」メンバー等。全国ネットワーク「元気なごみ仲間の会」事務局長。著書『だれでもできる ごみダイエット』(合同出版)、責任編集『ごみから未来を学びたい〜循環社会は企業と市民が創り出す』(日報)、『人と人・心と心をつなぐ「環境のまちづくり」75の事例集(元気大賞報告書)』、等。

遠藤 恵子

広島市立山本小学校 教諭

広島大学学校教育学部卒業(小学校課程、生物専攻)。広島市立安北小学校、大町小学校の勤務を経て、現職に。山本小学校では2年生を担当。2002年度より、小中学校において「総合的な学習の時間」が本格的に始まる中、どのように環境教育に取り組めばいいのか模索中である。

安達 一彦

環境省 総合環境政策局 環境保健部環境安全課長

1979年東京大学医学部卒業。同年、厚生省医務局国立病院課。1985年厚生省保健医療局結核難病課課長補佐。外務省在フィリピン日本国大使館、厚生省健康政策局、同保健医療局、同老人保健福祉局、同大臣官房厚生科学課、1994年鹿児島保健環境部長、科学技術庁原子力安全局放射線安全課企画官、宇宙開発事業団企画部主任開発部員を経て、2001年7月より現職。

小出 五郎

NHK解説委員、大妻女子大学 教授

1941年東京に生まれる。1964年東京大学農学部卒。放射線生態学を専攻。NHK入局。以後、科学番組ディレクターとして、環境、エネルギー、原子力、医学、生物などをテーマにした番組を企画、制作。1978年イギリスのBBCに2年間出向。1984年NHK特集「核戦争後の地球」で芸術祭大賞、日本ジャーナリスト会議大賞、イタリア賞などを受賞。1985年アメリカとの共同制作「知られざる脳の世界」キャスター。1989年NHKスペシャル「驚異の小宇宙・人体」のディレクター兼キャスター。解説委員になり、現在にいたる。2002年大妻女子大学教授、兼務。＜2002年の主な番組＞1/4 金曜フォーラム「人間とロボットの未来」、4/8, 9 ETV2002「末期がんと抗がん剤」、「末期がんと免疫療法」、5/18 BSフォーラム「燃料電池の期待と現実」、7/23 生活ほっとモーニング「再生医療のいま」、9/6 特集あすを読む「ヨハネスブルグ・サミット報告」、10/20 BSウイークエンドスペシャル「大地との共生・インド。ヴァンダナ・シヴァ」＜著書・訳書＞『原子力は必要か』（1976, 技術と人間社）、『脱石油エネルギー』（1979, 朝日新聞社）、『脳・1400gの宇宙』（1987, 朝日新聞社）、『驚異の小宇宙・人体』（1989, NHK出版協会）、『グリーン・ウェポン』（訳）（1983, 社会思想社）

野原 恵子

独立行政法人 国立環境研究所 環境健康研究領域 室長

お茶の水女子大学理学部物理学科卒業。その後お茶の水女子大学大学院人間文化研究科で人間環境学専攻、学術博士。お茶の水女子大学助手、国立公害研究所研究員、国立環境研究所主任研究員を経て現在にいたる。その間1993-94年、米国ジョージタウン大学医学部でNCI-JFCRフェローとして細胞生物学の研究に従事。2002年より筑波大学環境科学研究科連携大学院教授（併任）。現在ダイオキシンの免疫系への影響とその作用メカニズムの研究を行っている。

ヘンク ヴァン ロバレン

オランダ 国立保健環境研究所 (RIVM) 免疫毒性分野の研究グループ責任者

1981年にユトレヒト大学にて(腫瘍免疫学) 博士号を取得。その後、米国コネチカット州ニューヘイブンのエール大学臨床免疫学で2年間のポストドクトラルを修了した。1984年以降、ビルトーベンの国立保健環境研究所 (RIVM) にて免疫毒性分野の研究グループの責任者を務める。現在、RIVMの病理学および免疫生物学研究室の責任者、RIVMに設けられているWHO/IPCS免疫毒性およびアレルギー性過敏共同研究センターの責任者、およびEUROTOX免疫毒性および化学物質アレルギーに関する特別部会の代表を務めている。2002年5月1日、オランダのマーストリヒト大学の免疫毒性学教授に任命された。

ヒューゴー O. ベセドフスキー

ドイツ マールブルグ・フィリップス大学医学部生理学 教授

医師。スイス・リサーチ・インスティテュートの職員、のちに所長を務めた(スイス、ダボス、1972-87年)。神経免疫研究グループ(医学部研究教育センター、スイス バーゼル、1988-92年)の責任者を務めた。ドイツ、マールブルグのフィリップス大学医学部生理学教授(1992年-現在)。Science、Nature、Journal of Experimental Medicine、Proceeding of the National Academy of Sciences of the USAを含むピアレビューに発表した免疫と神経内分泌の相互作用に関する文献は100件を超える。複数の刊行物の編集委員も務める。

坂部 貢

社団法人北里研究所 北里研究所病院 臨床環境医学センター 部長
北里大学大学院 医療系研究科 教授

内分泌攪乱化学物質を中心とした微量有害化学物質の生体影響についての臨床基礎研究を行っている。1988-90年米国タフツ大学医学部リサーチフェロー(Carlos Sonnenschein教授研究室)。1988年東海大学医学部専任講師(組織学)。1994年東海大学医学部助教授(形態学)を経て、現在、(社)北里研究所・北里研究所病院・臨床環境医学センター部長、(学)北里大学大学院医療系研究科教授(兼任)。医学博士、米国Ph.D.

稲寺 秀邦

東京大学 環境安全研究センター 助教授

1985年3月金沢大学医学部医学科卒業。1985年4月-1994年千葉大学医学部第2内科。1994-96年フランスニース大学国立科学研究所。1997-99年東京大学大学院医学系研究科分子予防医学教室(助手)。1999年10月より東京大学環境安全研究センター(助教授)医学博士。専門分野：化学物質の生体影響評価、分子環境医学

吉里 勝利

広島大学大学院 理学研究科 教授

1943年4月3日生まれ。理学博士。広島大学大学院理学研究科教授。1966年に東京大学理学部を卒業し、1972年に同大学理学研究科修了。1987年、東京都立大学理学部助教授を経て、1990年からは広島大学理学部教授に就任。1992年から新技術事業団吉里再生機構プロジェクト、1997年からは広島県組織再生プロジェクトの研究統括を兼任。日本動物学会賞(1986)他、多数受賞。著書に『オタマジャクシはなぜカエルになるのか』(岩波書店刊)など多数あり。

ユンボ シ

米国 国立衛生研究所分子遺伝学研究室 遺伝子制御および発生に関する研究室分子形態発生ユニット責任者

1988年カリフォルニア大学パークレー校化学部にて博士号を取得。1992年以来、米国メリーランド州ベテスダの国立衛生研究所分子遺伝学研究室の遺伝子制御および発生に関する研究室分子形態発生ユニットの責任者を務める。同研究室は、アフリカツメガエルの甲状腺ホルモン依存性変態の分子的機序を研究している。具体的なプロジェクトは以下の調査。1) 甲状腺ホルモン受容体の*in vivo*における機能およびその根本的機序および 2) 変態時の組織リモデリングにおける甲状腺ホルモン誘発性遺伝子の役割。

矢尾板 芳郎

広島大学大学院 理学研究科附属両生類研究施設 発生遺伝学研究部門 教授 (施設長)

1973-79年東京大学医学部医学科 (医師免許取得)。1979-80年東京大学大学院博士課程医学系研究科第二基礎医学専攻。1980-83年大阪大学大学院博士課程医学研究科生理系へ転入学 (医学博士取得)。1983-85年大阪大学医学部助手。1985-90年京都大学医学部助手。1987-90年米国Carnegie研究所のResearch fellow。1990-2000年 (財) 東京都神経科学総合研究所 分子神経生物学研究部門副参事研究員。2000年-現在、広島大学大学院理学研究科附属両生類研究施設発生遺伝学研究部門。

バーバラ デメニーク

フランス 国立自然史博物館 (MNHN、パリ) 生理学 教授

国立自然史博物館 (MNHN、パリ) 生理学教授。MNHNのCNRSユニット (内分泌系制御の進化) および生物学部門の責任者を務める。数多くの国内および国際委員会にて活動。過去10年間、発生における甲状腺ホルモンの作用の基礎となる分子的機序の理解へ向けた研究活動を行っている。この目的のため、*in vivo* で使用するための数々のウイルスを使用しない体細胞遺伝子導入法および遺伝子導入アフリカツメガエルへの融合タンパク技術の適用法を開発している。

ロバート J. デンバー

米国 ミシガン大学 分子生物学、細胞生物学、および発生生物学助教授および副学部長

現在、米国アナーバーのミシガン大学にて分子生物学、細胞生物学、および発生生物学の助教授および副学部長。生態学および進化生物学部門においても教授職の任命を受けた。ルトガー大学にて理学士号、カリフォルニア大学バークレー校にて博士号を取得。カナダ、エドモントンのアルバータ大学およびカリフォルニア大学バークレー校にてポストドクトラルを修了。研究分野は、脳の発達における甲状腺ホルモンの作用、両生類の変態におけるストレスホルモンの役割、および両生類の発生におけるポリ塩化ビフェニルの影響。

妹尾 久雄

名古屋大学 環境医学研究所長 分子・細胞適応部門 内分泌・代謝分野 教授

1969年名古屋大学医学部卒業。臨床研究の後、1974年シカゴ大学医学部に留学。甲状腺ホルモンの作用機序に関する研究を行い、1978年に準助教授となる。1980年名古屋大学環境医学研究所助手、1982年助教授、1991年教授に就任、2000年には所長に就任し、今日に到っている。日本内分泌学会ならびに日本甲状腺学会などの理事を務め、第12回国際甲状腺学会および第7回アジアオセアニア甲状腺学会のプログラム委員長を務める。日本甲状腺学会三宅賞、アジアオセアニア甲状腺学会Daichi Prize受賞。現在、甲状腺ホルモンや内分泌攪乱物質の標的遺伝子の同定、細胞のストレス適応に関する分子メカニズムに関する研究を行っている。

ミンジャー ツァイ

米国 ベイラー医科大学 分子生物学および細胞生物学教授

国立台湾大学にて理学士号、カリフォルニア大学デイビス校にて博士号を取得、テキサス大学MDアンダーソンがんセンターにてポストドクター課程を修了。1973年、ベイラー医科大に教授として招かれる。過去数年間は胚発生におけるbHLH転写因子および核オーファン受容体の役割の解明に向けた研究を進めている。さらに、前立腺癌におけるステロイド受容体共役活性体の役割についても研究を行っている。

ジャック サマリユ

フランス 国立高等師範学校リヨン校 分子生物学および細胞生物学研究室責任者

フランス、リヨンのクラウドベルナルド大学にて博士号を取得。1981-82年ニューヨークのロックフェラー大学にて助教授を務める (H. Hanafusa教授の研究室)。1985年 (3ヶ月) 東京大学医科学研究所の豊島久真男研究室にて研究を行う。1987-97年、フランス国立高等師範学校リヨン校分子生物学および細胞生物学研究室の責任者を務める。1997-99年フランス、パリのCNRS生命科学部門の責任者を務める。1999年以降、フランス、リヨンのゲノムセンターの責任者を務める。2001年以降、リヨンのクラウドベルナルド大学医学部にて生化学の教授を務める。中曽根癌対策特別研究奨学金 (1985年、日本)、医学研究に関するローゼン賞基金 (1990年、フランス)、欧州分子生物機構会員 (1996年)、フランス国立科学研究センター銀メダル (1997年) を授与される。論文は120件以上、国際特許は5件にのぼる。

シューヤン チェン

米国 国立がん研究所 分子生物学研究室 遺伝子制御部門責任者

米国国立がん研究所分子生物学研究室遺伝子制御部門責任者。カリフォルニア州サンフランシスコ、カリフォルニア大学サンフランシスコメディカルセンターにて博士号を取得。甲状腺ホルモンおよびその受容体の分子作用の理解に貢献した国際的な知名度のある分子内分泌学者である。最近、甲状腺ホルモン受容体変形による変異が様々な疾患の原因になるという画期的な発見をした。国立衛生研究所の功労賞および技術移転賞を含む数々の賞を受賞。著作は140件を超える。国内および海外の数多くの科学会議に議長または主催者として参加。複数の国内専門家組織の主導的役割を担っている。

佐久間 康夫

日本医科大学大学院 システム生理学分野 教授

1971年3月横浜市立大学医学部卒業。1975年3月横浜市立大学大学院医学研究科修了、医学博士。1975年4月横浜市立大学助手・医学部第二生理学講座。1976年4月群馬大学講師・医学部附属行動医学研究施設・行動生理学部門。1976年(昭和51年)8月群馬大学助教授・同上。1976年9月米国ロックフェラー大学にて研修。1978年9月ロックフェラー大学准教授・神経生物学部門。1981年4月新潟大学助教授・医学部生理学第二講座。1988年2月弘前大学教授・医学部生理学第一講座。1993年5月より現職。研究領域：生殖内分泌学、行動生理学、脳の性差と性分化。賞・研究助成：第21回内藤記念科学奨励金(1990年3月)、第8回唐牛記念医学研究助成(1990年1月)、ブレインサイエンス財団研究助成(1989年3月)、日本医師会医学研究助成(1988年11月)、金原一郎記念医学医療研究振興財団研究助成(1988年10月)、持田記念医学薬学研究振興財団研究助成(1986年10月)、成茂神経科学研究助成(1985年10月)、第16回内藤記念科学奨励金(1985年3月)、第3回横浜医学会賞(1983年5月)。近著等："Neural Control of Reproduction", Karger, Basel 1997(分担)、"GnRH Neurons: Gene to Behavior", Brain Shuppan, Tokyo, 1997(分担編著)、『頭脳学のみかた』(1997, 朝日新聞(分担))、『内分泌生理学講義』(1998, 丸善(分担編著))、『ステロイドホルモンと脳科学』(2000, クバプロ(分担))、"Neuroplasticity, Development, and Steroid Hormone Action", CRC Press, Boca Raton, 2002(分担)、『情と意の脳科学』(2002, 培風館(分担))、その他英文原著論文60余篇、和文総説30余篇。

ジェイムス G. フォウス

カナダ コンコーディア大学 心理学部行動神経生物学研究センター 準教授

性行動と神経内分泌機能を促進する神経化学イベントおよび分子イベントについて研究を行っている。実験動物の性的興奮、覚醒、抑制、および交尾行動における脳モノアミン系と神経ペプチド系の役割、ならびに、一次および条件付きの性刺激に対するニューロン性反応と行動反応において特に交尾または交尾相手の好みの決定を司るステロイドホルモンと細胞信号伝達機序が果たす役割に関心を持っている。現在、ステロイドホルモンの神経化学的かつ分子的影響と性刺激に関し、ボルタンメトリーや微小透析のような *in vivo* の技術と免疫細胞学や *in situ* ハイブリダイゼーション組織化学のような半ビボ技術を併用して精査している。所属する研究室は、カナダ保健研究機構、Fonds FCAR(ケベック州)、国立衛生研究所(米国)、カナダ自然科学工学研究会議の研究助成金により設立された。また、エリー・リリー社、ファイザー社、パラチンテクノロジ社、トレガバイオサイエンス社からコンサルティング補助金を受け、様々な精神病薬の性に関連する副作用について研究を行うと共に様々な性機能障害のための新しい治療薬の同定を進めている。1983年、ワシントンD.C.のアメリカン大学にて心理学で文学士号(優等卒業学位)を取得。カナダ、プリティッシュコロンビア州バンクーバーのプリティッシュコロンビア大学にて生体心理学で文学修士号(1986年)および博士号(1990年)を取得。修士号研究では、雌の性行動におけるオピオイド受容体の役割に関し、ボリス・ゴルザルカ博士と共同で研究を行った。博士号研究では、雄ラットの性行動の性的欲求と完了行動の面におけるドーパミンの役割に関し、トニー・フィリップス博士とクリス・フィビゲル博士と共同で研究を行った。1990-92年、ロックフェラー大学にて、Donald Pfaff博士の指導下で神経生物学と行動学に関し、NIHポストドクトラル特別研究生として研究に従事。雌ラットの性行動の性的欲求と完了行動の面におけるオピオイドの役割、および、雌ラットにおいて、様々な種類の性刺激によって脳がどのように活性化するかを研究。1992-97年、コンコーディア大学心理学部行動神経生物学研究センターにて助教授を務める。1997年-現在、コンコーディア大学心理学部行動神経生物学研究センターにて準教授を務める。生物学部(1997年)および化学/生化学部(1999年)大学院指導教授を務める。学部生向けの「行動神経生物学基礎」の初歩理解コースおよび上級学部生向けの「ホルモン、行動、および動機付けに関する神経生物学」のコースを担当している。大学院生向けの「細胞信号伝達」、「神経内分泌学」、および「精神薬理学」のコースも担当している。現在、研究室にて8名の大学院生および12名の学部生を研究アシスタントとして指導している。

スチュアート A. トベット

米国 マサチューセッツ医科大学 生理学部 生理学助教授

チューレン大学にて生理学的心理学で理学士、マサチューセッツ工科大学にて神経/内分泌調節で理学修士号および博士号を取得。専門分野は発生神経生物学および神経内分泌学。

長濱 嘉孝

岡崎国立共同研究機構 基礎生物学研究所 教授

1966年北海道大学水産学部卒業。1968年北海道大学水産学部修士号取得(水産学)。1971年北海道大学水産学部博士号取得(水産学)。1970-71年北海道大学水産学部ポストドクトラルフェロー。1972-74年カリフォルニア大学バークレー校動物学教室ポストドクトラルフェロー。1974-76年ブリティッシュ・コロンビア大学動物学教室ポストドクトラルフェロー。1977年カリフォルニア大学バークレー校動物学教室リサーチャー・アシスタント・エンドクリノロジスト。1977-86年生物科学総合研究機構基礎生物学研究所助教授。1996年より現職。

森田 昌敏

独立行政法人 国立環境研究所 統括研究官

1967年3月東京大学理学部化学科卒業。1972年3月東京大学大学院工学系研究科博士課程修了(合成化学)(工学博士)。1972年4月東京都立衛生研究所水質研究課研究員。1978年11月国立公害研究所計測技術部生体化学計測研究室主任研究員。1980年7月国立公害研究所計測技術部生体化学計測研究室室長。1989年4月国立公害研究所計測技術部長。1990年7月国立環境研究所化学環境部長(所内組織変更による)。1995年4月国立環境研究所地域環境研究グループ統括研究官。2001年4月独立行政法人国立環境研究所統括研究官。(併)化学環境研究領域長、(併)環境ホルモン・ダイオキシンプログジェクトリーダー、現在に至る。併任：1980年より東京大学医学部非常勤講師(衛生学)。1998年東京大学理学部非常勤講師(化学科)。1989年より環境庁中央環境審議会専門委員。1998年より厚生省中央薬事審議会専門委員、他多数。専門分野：分析化学、環境科学、毒性学。学会等：日本化学会環境委員会委員、日本環境化学会会長、日本内分泌攪乱化学物質学会事務局長、Journal of Environmental Analytical Chemistry, Regional Editor、Journal of Field Analytical Chemistry, Editor。賞罰：1999年6月水環境学会学術賞。著書：『地球環境ハンドブック』(共著、朝倉書店)、『生物モニタリング』(共著、読売新聞社)、『フロン』(共著、日刊工業新聞社等)、『ダイオキシン入門』(監訳、(財)日本環境衛生センター)、『ミネラル・微量元素の栄養学』(共著、第一出版)、『注目の臨床実験検査法』(共著、中山書店)、『環境水質分析法マニュアル』(共著、環境化学研究会)、他

フレデリック S. フォン サール

米国 ミズーリ大学コロンビア校 生物学教授

ミズーリ大学にて生物学の教授を務める。神経科学で博士号を取得し、生殖生理学でポストドクトラルを修了。政府機関および非政府組織の助成金レビューパネルおよび全米科学アカデミーの「環境中のホルモン活性を有する物質に関する委員会」に参加している。米国科学振興協会の研究員でもある。研究分野は、天然ホルモンならびに自然発生的・人工的内分泌攪乱化学物質に対する胎児期曝露による長期的影響である。

マルグレート シュルンフ

スイス チューリッヒ大学 薬理学毒物学研究所 上級研究員

内分泌攪乱化学物質(特に化粧品)の新たなクラスの同定とそのリスクアセスメントの評価について研究を行っている。新たな内分泌攪乱化学物質の*in vitro*および*in vivo*での同定では、改善された試験条件およびエンドポイントについて研究を行っている。新たに同定された内分泌攪乱化学物質のリスクアセスメントは、中枢神経および末梢臓器における分子的機序の変調の分析などの古典的発生毒性パラメーターにより発生毒性に関する分析が行われている。研究過程において、化粧品で広く使用されているUVフィルターが内分泌攪乱化学物質であることを初めて同定した。チューリッヒ大学およびチューリッヒのドイツ連邦技術研究所で環境毒性の講演者を務めている。

アンドレアス コルテンカンフ

英国 ロンドン大学 薬学部 講師

ドイツのミュンスター大学にて化学および哲学を専攻。プレーメン大学にてクロム化合物の発がん作用機序に関する論文で博士号を取得。ロンドン大学薬学部の講師である。現在の研究分野は内分泌攪乱化学物質の複合影響。

クラウディア ロンカンシオ ピーニャ

欧州委員会(EC) 内分泌攪乱化学物質ファイル担当科学担当官

欧州委員会にて内分泌攪乱化学物質ファイルを担当する科学担当官。リエージュ大学にて内分泌攪乱化学物質がもたらすヒトへのハザード分析、リスク分析に関連したデータの科学的評価、遺伝毒性およびヒトの健康問題について幅広い経験を得た。研究機関、国内の行政機関、大学に勤務した。既知および潜在的内分泌攪乱化学物質の評価、リスト作成を目的に開催された第1回EEC専門家会議の専門家パネリストに選ばれた。

ヨルマ トッパリ

フィンランド トゥルク大学 小児科および生理学 教育機関研究者

フィンランド、トゥルク大学小児科および生理学で研究を行っている教育機関研究者。また、デンマーク、コペンハーゲンの国立大学病院の成長および生殖部門の客員教授を務める。小児内分泌の専門家である。男性生殖器官の発達および機能について研究を行っている。停留精巣、尿道下裂、精子の質、および生殖能などの男性の生殖健康に関する複数のヨーロッパにおける研究に参加している。

岩本 晃明

聖マリアンナ医科大学 泌尿器科・生殖医療センター 教授

1970年横浜市立大学医学部卒業。医学博士。1986年客員教授としてカナダケベック州マックギル大学医学部へ男性不妊症の研究のため留学。帰国後1989年より聖マリアンナ医科大学医学部泌尿器科助教授、1996年より、同教授、現在に至る。専門は泌尿器科・アンドロロジー・生殖医学。造精機能障害の臨床的・基礎的研究に従事し、1997年よりコペンハーゲン大学スカケベック教授との国際共同研究で環境ホルモンの男性生殖機能への影響について疫学調査に参加している。

ニールス ヨルゲンセン

デンマーク リグズ病院 発育/生殖部門 医師

1989年以来、男性病の分野で化学的研究および臨床研究を行っている。未成熟生殖細胞および精巣生殖細胞がんとの関係に関する論文により博士号を取得。1996年から、男性の生殖健康、特に精子の質、地域差、経時的傾向、およびその理由に科学的に焦点を当てている。男性病学および内科内分泌学の分野で臨床教育を受けた。

田辺 信介

愛媛大学 沿岸環境科学研究センター 教授

1975年愛媛大学大学院農学研究科修士課程修了。1977年愛媛大学農学部助手。1985年農学博士(名古屋大学)。1988年愛媛大学農学部助教授。1995年愛媛大学農学部教授。1999年より愛媛大学沿岸環境科学研究センター教授。1985年日本海洋学会岡田賞受賞。1999年日産科学賞受賞。2000年ISI引用最高栄誉賞(環境化学分野)受賞。環境ホルモンによる地球規模の環境汚染と野生生物およびヒトに対する影響について研究。主な論文に、「化学物質開発の新たな視点」日経サイエンス30(12), 36-40(2000)がある。

エリザベス A. ジレット

米国 フロリダ大学 補助研究員

フロリダ大学の補助研究員およびチューレン大学/ザビエル大学生物環境研究センターの客員学者である。看護学教授を長年務めたあと、1992年に人類学で博士号を取得。汚染物質と小児の健康との相互作用を人類学的見地から研究していることで知られる。リスクを抱えた集団の研究における調査技術は、書籍にて紹介され、世界中で採用されている。斬新な汚染物質調査を行うことで著名であり、カナダの放送局はジレット氏の研究とその意味に関する国際的な特別番組ビデオを制作した。国連および世界各国の政府の技術専門家である。現在、思春期および成人初期に対する複数の化学物質の影響について研究を行っている。

平原 史樹

横浜市立大学 医学部 産婦人科学 教授、横浜市立大学 国際先天異常モニタリングセンター センター長

1977年横浜市立大学医学部卒業、研修後1979年より横浜市立大学医学部産婦人科学教室、1984年～米国メイヨークリニック・メイヨー医科大学免疫遺伝学教室リサーチフェロー、1991年～横浜市立大学医学部講師、1998年～横浜市立大学医学部産婦人科学講座教授、同附属病院副病院長、同附属病院遺伝子診療部部长、横浜市立大学医学部国際先天異常モニタリングセンターセンター長、国際先天異常監視機構日本プログラム副日本代表、日本産婦人科医会先天異常委員会副委員長、環境省「内分泌攪乱化学物質のヒトへの影響調査研究班」研究員。専門は、臨床遺伝学、先天異常学。

森 千里

千葉大学 大学院 医学研究院 環境生命医学 教授

1984年旭川医科大学医学部卒業。1984年京都大学助手(医学部解剖学第3講座)。1989年京大医博。1989年カナダマニトバ大学医学部生理学教室 Visiting Instructor。1990年米国国立衛生研究所環境健康科学研究所(NIH/NIEHS) Visiting Associate。1992年京都大学助教授(大学院医学研究科生体構造医学講座)。1998年横浜市大医学部客員教授。2000年千葉大学医学部教授。2001年千葉大学大学院医学研究院教授。

ジョン A. マクラクラン

米国 チューレン大学/ザビエル大学 薬理学 教授、ウェザーヘッド財団環境学 名誉教授、生物環境研究センター 所長

チューレン大学/ザビエル大学薬理学教授。ウェザーヘッド財団環境学名誉教授としてチューレン大学の全学部議長を務めている。生物環境研究センターの所長でもある。エストロゲン様化学物質およびホルモンの発生期内分泌学に焦点を置いた研究を行っている。マクラクラン教授は、日本では「真暗苦蘭(Truly Dark Suffering Orchid)」という名前で知られているが、最近、第4回環境ホルモン国際シンポジウム(e.hormone2002)および第1回環境内水銀に関する水俣-ニューオーリンズワークショップを主催した。何れの会合にも数多くの日本人研究者が参加した。

ジョン P. マイヤーズ

国際連合基金 シニアアドバイザー

内分泌攪乱に関するベストセラー『奪われし未来』の共著者。カリフォルニア大学バークレー校にて生物科学で博士号を取得。現在、国際連合基金のシニアアドバイザー、ウェブサイト(www.OurStolenFuture.org)の発行責任者、およびEnvironmental Health Sciences Information Centerの創設者である。1990年より2001年末まで、バージニア州シャーロットビルルのW. アルトンジョーンズ財団のディレクターを務め、核戦争のリスクを減らすと共に地球環境を保護するための同財団の博愛主義的支援活動を指導した。

リチャード A. ベッカー

米国化学工業協会 パブリック・ヘルス・チームシニア・ディレクター

カリフォルニア州立大学アーバイン校にて薬学および毒物学で博士号を取得。米国毒物学委員会の専門委員を務めている。哺乳動物毒性研究室のディレクターにはじまり、その後カリフォルニア州環境保護庁で10年以上にわたり州政府科学者および部門ディレクターを務めた。現在は、米国化学工業協会のパブリック・ヘルス・チームのシニア・ディレクター。米国化学工業協会の主席毒性学者であり、ホルモン様活性を有する物質、高感受性の系統群、新しい代替試験法など、新たな健康リスクに関する科学的問題を扱っている。